

第11回図書館利用教育実践セミナーin京都

指導サービスの次のステージへ！

「力」とするための工夫～教員からのヒント～

丸本郁子(大阪女学院短期大学名誉教授)

1 はじめに

- 1) 情報リテラシーは力
- 2) 力とするための仕掛け
- 3) 次のステージ 「情報からの自立」

2 情報リテラシーは力の源であるとの確認

- 1) 学カアップと情報リテラシーの関連  
図書の出出冊数の変遷＝主体的学びの指標として
- 2) 確認できたこと  
指導サービスは効果がある  
カリキュラムと統合された時にこそ「力」となる＝ニーズを意識化する時  
図書館員の力量認知

3 学科目としての指導: 力とするための仕掛け

- なぜ学科目としての実践を語るか  
全員をカバーする夢(ガイドラインが示す一つのステップ) そしてそれから・・・

4 学科目「研究調査法」の概要

- 1 年次必修科目 半年 2 単位 導入科目としての情報リテラシーの基礎  
評価法(小論文 60+課題提出 20+試験 20)、教員への授業評価(全学共通)

5 科目の推移

- 1) 実態に合せ: ツールの紹介→ プロセス志向→ リテラシー面の重視 → e-learning 化
- 2) 学力評価が示すもの: 教育課程実施状況調査、国際学力調査(PISA調査)など
- 3) スタンダードやガイドライン

6 力とするための要素と仕掛け

- 1) ニーズを創る: 擬似モチベーション: 能動的学習への仕掛け①
- 2) 学習の自己管理: 能動的学習への仕掛け②
- 3) 仕掛ける手順  
ターゲットを明確に→目標達成までのステップ分析→適切なワーク  
基本パターンを示す→共通練習問題→各自の課題でワーク
- 4) プロセスに寄り添い、丁寧に追う(しつこく)
- 5) 実態の確認、素早いフィードバック 教員へも学習者へも
- 6) 時間(消化するため)(深く考えるため)
- 7) 時間(くり返し、他の場面での利用)
- 8) 発見、驚き
- 9) 「悪文」の効用

10) 論拠を求める「どうしてそう言える？」

11) 評価法の明示

12) 自己評価

## 7 学生の評価

### 8 達成できたもの

1) 意識の変革:問題解決には適切な情報が必要と実感し、簡単ではないが楽しい

プロセスと理解し、自分にも出来るとの自信を持つ

2) 問題解決プロセスの経験:疑問を認識し、新しい情報を得、既存の知識と勘案し、

新しい知見を構築し、根拠に基づき、適切な形で表現・発表していく

3) 情報の性格の理解:あくまで製作者の見方・立場・意図・限界内で表現されたもの

4) 製作物への敬意:苦勞して書いた経験から生まれる尊敬の念。 作品の限界も知る

5) 情報読み取りのポイント:筆者の立場を理解し、考察を加え、必要な部分を抜き取る

6) 情報源としての図書館の有用性の認識と利用法

### 9 確認できたこと

1) 人間とは、もともと興味・関心を持っていて、自ら学んでいくもの

2) 出会い・気づきで変わる

3) 授業への図書館のバックアップの必要性

4) 図書館独自の指導サービスへのニーズの増加:立体的サービス

5) 専門情報、新情報は図書館で

6) 教員不足

7) 自主教材(手作り)の大切さ

### 10 次のステージへ

1) 独立学科目 (導入教育レベル)(専門教育レベル) 教員+図書館員

2) 図書館員はパスポート習得を

3) 全ての図書館で「情報からの自立」支援を!

「情報からの自立」とは、「人として、自分らしく」自立する行動ができるようになるために、それを阻害する「思い込み」による偏見や誤解を解除し、その行動1つひとつに情報をチカラとしていくこと。

結城 美恵子

## 資料

日本図書館協会利用教育委員会『図書館利用教育ガイドライン合冊版:図書館における情報リテラシー支援サービスのために』日本図書館協会 2001

同上『図書館利用教育ハンドブック 大学図書館版』日本図書館協会 2003

「特集:情報リテラシーの育成と図書館サービス」『現代の図書館』 vol. 45 no.41 (2007.12)

丸本郁子「情報リテラシー教育の評価」『大阪女学院短期大学紀要』 no.30 .( 2001)

結城美恵子『情報からの自立』ユック舎 2008.3

ACRL Standards & Guidelines <http://www.ala.org/ala/acrl/acrlstandards/standardsguidelines.cfm>